

狩人蜂

小松 貴（信州大学理学部工学系研究科 市野研究室）

狩人蜂（カリウドバチ）とは、膜翅目有剣類に含まれる昆虫の中で Chrysidoidea, Vespoidea, Apoidea の内 Spheciformes に含まれるグループの総称を指す。日本国内で約 700 種もの膨大な種を包括するこの大群は、およそ 1 億年前の白亜紀前期に寄生性ハチ類から派生したと考えられている。

これらの蜂の雌 female は、自らの幼虫の餌として他種の昆虫を狩ることで知られており、捕縛された獲物は瞬時に毒針により麻酔を施される。毒針は一寸の狂いもなく獲物の体内の神経節を麻痺させる故、獲物は最小限の代謝活動のみを行える状態で巣へと貯蔵され、幼虫の食料として利用されることとなる。

狩人蜂の仲間には主に里山の環境に依存した生態を持つ種に富み、人間にとって身近な環境で観察される生物の一つである。また、狩人蜂の獲物となる昆虫の中には、衛生・農林業の観点からみて非常に重要な害虫が多く含まれる点から見ても、これらの昆虫群は我々の生活に密接に関係しているといえる。

本発表では、本州・中部地方を中心とした里山を生息環境 Habitat とする狩人蜂のうち、比較的野外において遭遇頻度の高い種を紹介する。



Fig. 1 *Liris* sp.(Crabronidae) stings her prey
Velarifictorus sp.(Gryllidae)



Fig. 2 *Bembicinus* sp.(Nyssonidae)and
her prey *Tettigometra*
sp.(Tropiduchidae)



Fig. 3 *Campsomeris* sp.(Scoliidae)seaching
for larva of Scarabaeidae.